

# スポーツ史の意義を考える

## —試論—

経遠 雄三

倉敷芸術科学大学生命科学部

(2009年10月1日 受理)

アマチュアであるにせよ、プロであるにせよ、現在、日常的にスポーツを行う人間のほとんどが、スポーツ史の必要性を、ましてや有用性を感じてはいないように見える。プロスポーツマンの華やかな活動が大きく報道される一方で、一般の人にも運動とかスポーツの効用がしばしば強調され、適度に身体を動かすことが健康を促進すると説かれる。あるいは健全な精神は健全な肉体に宿るという古典的な前提を含ませつつ人間形成に話に移り、根性論からチームワークにまで及んだりする。つまりスポーツ、もしくは運動は身体と精神を鍛え、社会性をも養成する人間の活動であり、実践するものだが、それだけ眼前のことだけに眼が向けられがちで、話題が豊富にあるから、過去の世界を扱うスポーツ史は入る余地がないのであろう。元来、職業としていなくても現役のプレイヤーは、自己の記録とか技術の向上以外には関心が薄いし、単に楽しみの対象として時に自らプレイする人間にとっても、過去への系統的な遡及、あるいは史的展望とは、せいぜい有名選手の輝かしい経歴を追って遠い目標に設定したり、憧れの英雄とする時に顧みるぐらいであって、現状以上に関心を振り向ける世界と見なすことはない。

しかし四年に一回のオリンピックが近づくと、小・中学校のみならず、テレビや新聞等のジャーナリズムでも、何らかの機会にクーベルタン男爵による近代オリンピックの復興運動から遡って、中には日本人女性と結婚したオーストリアのクーデンホーフ伯爵の功績などにも触れながら、古代ギリシア人による原オリンピックに話題が及ぶ機会が多くなる。そして当時ギリシアはポリスと呼ばれる数多くの都市国家から成立していて、有名なアテネとスパルタのケースのように、分立抗争、絶えず争い合い、戦争を行っていたが、四年に一度のオリンピック大会の時だけは停戦をして、つまりいわゆる「ゼウスの休戦」<sup>1)</sup>をして、選手を送り込んだのだと語られることであろう。そして更に話が進んで、マラソンの走行距離が42.195 kmと中途半端な数字になっているのは、ペルシア戦役の時に、マラトンの戦いの勝利をアテネに報告するために伝令が走った距離に基いているからだ、と付加されることもある。

その際、子供、成人を問わず、大抵の人間がこういう知識は常識だと承知していながら、戦争と随分関係が深かったのだと改めて認識するのではないだろうか。そして今更ながら、スポーツは争いの、ひいては戦争の代替物だったのだと思い返しもしよう。無論、古代ギ

リシア時代の人々のスポーツという概念は今日のそれとは異なるものだった。何より支配層だけのもので、奴隷社会の中でいわゆる市民のものではなかった。しかし当時の他の諸国の状況を見る時、武器を持たない闘技など、洗練された競技にまで高められたスポーツを行っていた民族が他にどこに存在したであろうか。通常、戦士が行ったのは、狩猟とか戦技訓練で、死者も発生する命がけの闘争そのもののためだった。余暇を楽しみ、心身の統一を心がける遊技という発想はその後長く現れはしなかったであろう。ただ古代オリンピック大会は神に捧げる祭典だった（だからゼウスの休戦といわれる）など、現代とは違う点は色々とありはする。<sup>2)</sup>

ここで言いたいのは、このように考えて見るだけでも、我々はすでにスポーツの過去の流れを振り返っているではないか、そしてスポーツ史の意義はその線上にあるのだということである。人間の闘争本能は、プラスのヴェクトルを帯びる時は、自然の開発、環境の困難に打ち勝つなど打開する原動力となるが、マイナスに向かえば、破壊、殺人または戦争等、人類滅亡への情熱となる。ギリシアでも実際には全面的に休戦というわけではなかった、ペルシア戦争が続いていた、という主張もあるが、少なくともギリシア人が戦争を回避し、この厄介な本能を制御し、転換させる試みにかなり成功していたことは明らかである。当時、参加者は大抵は徒歩で会場に赴いたが、その際最大の問題は各ポリス間の悪感情、ひいては戦争状態からの安全な交通だった。主催者はオリンピックの開催を各ポリスに知らせるのにも頭を悩ませたという。「エケケイア（オリンピックの休戦）は本来『手を抑える』ことを意味し、刀の柄<sup>ツカ</sup>に手をかけたのを差し止めることであった。」<sup>3)</sup>

これが平和思想などという大げさな理念に支えられたものではなく、素朴な願望の域を出なかったとしても、スポーツを以て、闘争本能を平和的な活動へと昇華させる知恵を現代人に示唆してくれたのである。代替物だから、確かにその限界が時折露出して、モスクワ大会をアメリカがボイコットするという、その趣旨を全く理解していないケースも生じたし、あるいはミュンヘン大会の際の、イスラム系のテロによるイスラエル選手の大量虐殺という、人類の知恵を逆手に取り、希望と夢を一挙に吹き飛ばすような空しさを感じさせる事件が起こったりもした。それどころか逆に戦争によって流れた大会すら何度かある。現代の我々は、過去に到達した人類のレベルからしばしば滑り落ちようとする、そのぎりぎりの線で危うく踏みとどまっているのだという自覚は重要なものではないか。

歴史とは、太古の昔から現代に至る、人間の軌跡を辿るものだと漠然と規定すれば、そこに見出すのは、絶え間ない争いの跡でしかないように見える。日常的に伝えられる世界各地の争い、方法や規模を変えての爆撃や襲撃の報道を見ても、人間の歴史とは戦争の歴史であるという暗澹たる見方、大雑把な断定に、笑いもせずに反駁出来る希望の論拠はどれくらいあるだろうか。数少ないその可能性の一つがオリンピックの存在というわけである。言い換えれば、人間のもう一つの側面をスポーツ史の中に見出すことが出来る。無論技能の向上には役立たないとはいえ、それを行っている意味の自覚、人間性の確認として

重要なのである。

いわゆる体育の通史は、筆者の乏しい読書体験の及ぶ限りだが、古代ギリシア・ローマからの体育観を、背景となる社会、国家の政治、文化や教育とからめながら追って、肉体が蔑視された中世にも若干触れながら、ルネッサンス以後の近世における急速な発展を述べるのが通常のものである。<sup>4)</sup>特に18世紀のルソーやシラー、19世紀以後のグーツムートの「青年の体操」とかヤーンの「ツルネン」などを初めとする体育思想、あるいは実践形態の果たした役割の解説に力点が置かれる。<sup>5)</sup>無論このスタイルはそれなりに有意義であり、読者を大いに啓発することを疑わないが、他方で、美しく、健康な肉体とか精神の育成を必要性から行うのではなく、単純に人間の本性の発現として、静穏な生活への願望は無論のこと、例えば闘争本能、遊技衝動、身体運動の単なる快感、物欲等々を軸に据えて、各人が知っているようで案外自覚していない社会史的スポーツ史もあり得るのではないかと思われる。言い換えれば、一定の理念に従っての秩序付け、いわば上からの展望でなく、下からの、人間に潜在する可能性を如何に展開して来たかを辿ろうとするのである。しかし漠然とスポーツ全般に亘って遡っても、人間性の何が認識出来るのか、容易ではないから、もう少しジャンルを分けて考察してみよう。

例えば、ボクシング。身体の内面から噴出する若さの、あるいは訳の分からぬ暗い衝動をただやみくもに放出させたのが、あのローマのコロッセウムでの生死を賭けたグラディエーター拳闘士たちだった。これをルール化したのが現代ボクシングとかレスリングであろうとは、誰でも分かるから、それ以上知る必要はないではないか、という反論があるかも知れない。ではそのルールはどのようにして決められたのだろうか？

あるいは球技を例として追ってみよう。ラグビーの奇妙な変形は、まず関心をそそるが、これはそんなに昔に発生したものではないらしい。牛の膀胱に空気を入れて膨らましたものから発達したとよくいわれるが、普通のまん丸い形のボールだけでも様々な大きさや堅さ、柔らかさ、真空か詰め物があるか、等々様々にあつてずっと古い歴史を持つようだ。しかしただこの丸い形が沢山の人間の情熱を如何にかき立て、様々に工夫をこらさせ、太古の昔からその大部分の時間を食物とか住居、疫病、戦争等々、様々な心配に明け暮れていた人生の隙間を埋め、救済し、活力をつけてくれたかと想像すると不思議な気がするのではないか。最初は恐らく石ころか何かの塊（ホメロスによると鉄の塊）を投げて戯れたのが始まりで、段々と円形になり、複数の人々の間とか団体で競う形に発展したのであろう。ちなみに、古代ギリシアには、丸いスポーツ用具は、円盤、あるいは砲丸しかなかったようである。

例えばサッカー。ちょっと眺めただけでも、ラグビーとサッカーは似ているところが沢山目について、元来親戚関係にあったのではないかと想像される。ただサッカーは球を蹴るだけで、手に触れてはならない、つまり禁欲的であるのに対して、ラグビーでは蹴るのはもちろん、手で触れてもよいどころか抱えて逃げ、それにタックルという、いわば一種

の暴力的な妨害行為をしてもよいところが大きな差だというわけだが、蹴るという行為も一歩間違えれば、常に暴力行為に連動する危険性を持つことは容易に見て取れる。

実際、この二つのスポーツが分かれたのもその点にあったらしい。これはちょっと解説書を覗けば大抵書いてあるのだが、元来それまで地方によって、色々なタイプやルールの蹴球が行われていて、イギリスのパブリックスクールでもかなり早くから採用されていたという。これには大きく分けて二種の原型があったのを、何でも 1863 年に J.D. カーライトという人がルールの体系化を説き、蹴球協会の結成を提唱したという。<sup>6)</sup> その会合の席で問題になったのが、手を使うタイプの競技を採るべきか、手を使わないタイプを採るべきかだったそうだ。そして使わない方の支持者が集まって蹴球協会が結成され、他方でラグビー地方では通用していた使う方がそのまま残り、これはこれで結構な数の支持者がいて普及したというわけである。

タックルを暴力行為というとな怒られそうで、正確にはルール化された暴力行為というべきか。というのが、このボールを蹴る競技の原型は、上にも触れたように、長い歴史を持つのだが、競技で骨折等の怪我をするのは当たり前、下手をすると死者すら出たという。だから近代の蹴球は、その前の伝統的なタイプの蹴球とは全く異なる、新しい発明だという説もある。それ以前の蹴球については、「前の土曜日に、さる若者が大勢の仲間と一緒に… 蹴球ボールを蹴っている間に、ボールに追いつこうとして無理をしたために倒れ、多量の血が口と鼻から出た。彼は直ちに居酒屋の… 暖かいベッドに寝かされ、刺絡術を施すために外科医が呼ばれたが、その甲斐もなかった。」「1617 年以後のある時、イーストラダム（フォーク）のセラー氏なる人物が、蹴球で脚の骨を折って寝たきりになった挙げ句、不慮の死を遂げた。」<sup>7)</sup> というような記録が夥しく残っているらしい。だから 1583 年にイギリスの F. スタッブズという人物が「蹴球技については、遊技または娯楽というよりは友好的格闘、親睦的スポーツまたは気晴らしというよりは、流血を伴う殺人的修練と呼ぶべきだと断言する。」<sup>8)</sup> とまで罵倒しているような状況だったそうである。

つまり蹴球は闘争本能むきだしのスポーツとしてずっと低俗と見なされ、下層階級の、あるいは田舎者のスポーツとして軽蔑されて来た。それにもかかわらず、一時期を除いて完全に中止されたことはなかった。それどころか度々禁止令が發布されてはいるのだが、非常に人気があって、どんなに禁止しても止められなかったのである。それは血気盛んな学生たちにとっても同じで、1580 年、ケンブリッジ大学の学長によるこんな布告がある。「いかなる地位、身分の学生であろうとも、各自の学寮の構内を除いては、いかなる場所、いかなる時においても蹴球をなすべからず…。」<sup>9)</sup> ヨーロッパの中世は、キリスト教の信仰が社会の指導理念だった時代で、先にちらと述べたように、現世、即ち肉体が蔑視され、敬虔な心情が尊ばれて、運動や活力の思う存分な発散の必要性が認められなかった「スポーツの暗黒時代」である。それから抜け出し、ルネッサンスを経て近世に入ったばかりのこの時代は、まして保守的な大学においては、脚の成長発達を促すスポーツと考えられ

ていた蹴球は、まだまだ初期の混乱期にあったのである。

現在のようなすっきりとした形に規則化されるまでに、楽しんだり、嫌われて圧迫されたり、犠牲者を出したりしながら、数百年という時間が必要だったということを知ると、現在のプレイヤーも、ルール違反がどれだけの大罪であるか、素直に了承出来るのではないか。

だからスポーツ史は思想史であると同時に社会史なのである。各時代に現代から見ると考えられないような独特の風習や発想が支配的で、それなりの論拠に基づいた形態を取っていたわけである。

しかし「友好的格闘」「流血を伴う殺人的修練」であった蹴球が、下層のスポーツといわれたのに対して、上流社会、貴族階級のスポーツであったテニスの場合は順調に発展して来たのであろうか。そもそも発生の形態から暴力とはもちろん、様々な問題とは無関係だったと思われるのだが。そこで歴史を振り返ってみると暴力問題は、確かに蹴球の場合のような形では存在しなかったが、競技には違いなかったから、その代替物であることに変わりはない。ただ少々遠いだけである。別な問題がついて回った。話が少々遠回りになるが、その代わりぐらい奇妙な点が目につくのである。例えば一度相手のボールを打ち返し損なった時、15点を献上するというのは何故だろう？これが3回続いた時、何故3回目は45点でなく40点なのか？こういう一見合理性を欠いたルールには、歴史的に条件づけられた根拠があることは、容易に想定される。そしてテニスの本場はウインブルドンのあるイギリスらしいから、その発生時に何か理由が有るのだらうと仮定してそう誤ってはいない。ただ発生の土地は意外なことにイギリスではなく、対岸のフランスなのである。しかしもしこのゲームがそのままフランスで発展して普及していたら、明晰性を好む国民性で、こんな妙ちきりんな配点になってはいまい。フランスが発明国の権利を振りかざして国際的に修正を要求する日が来るかも知れない、とはあるスポーツ史家の推定である。そうすると英仏戦争が起こるか？

それはともかく、無論、現代の日常の生活の他の領域でも活躍する半端な数字は珍しくはない。例えば時計の数え方は古代バビロンに由来するといわれている。同様にこのテニス競技の奇妙な数え方も、どうやら14世紀にフランスで賭け金に用いられていた貨幣の単位に遡るらしいのである。何でも当時1グロのドゥニエ銀貨があって、これは15ドゥニエの価値があった。そしてその当時1セット4ゲームから成っていたから、4回15ドゥニエが賭けられたので、15-30-45-60と増えていったことになる。更に16世紀以来15-30-40となったのは、forty-fiveがfortyと言いやすくされたのだそうである。<sup>10)</sup>

明らかにこの配点の方法には、当時ごく普通に金がからんでいたことが反映されているのであって、これはこのゲームが王侯貴族の専有物だったころから行われていた。それはまずプレイヤー自身が賭けることから始まった。例えば16世紀イギリスのヘンリーIV世とかヘンリーVIII世は無類の女好きとテニス好きで知られているが、競技でしこたま儲けて

それが国庫の中に入らないように、また徴収が難しいとなると遠慮なく法的措置を執ったという。だから逆にお手元金庫から大量に支払わなくてはならなくなる場合もあったわけで、借金を抱えた王も珍しくはなかったらしい。次に観客が賭けることも、現代の競馬、競輪と同じようにごく普通に行われていた。これは20世紀に入っても堂々と公式、非公式に行われていたという。しかし後で述べるようにこのゲームが廃れた時期があり、その原因は審判にあった。特に線審。この役をナケ(Naquets)というが、16世紀以来、この言葉は「人のいいなりになる、下劣な従僕」という意味になったというから、特別に虚偽と買収にかかりやすかったことを示している。パリーでは毎日投じられる額は3000フランだったと、あるテニス史は書いている。<sup>11)</sup>

現代ではスポーツと麻薬(筋肉増強剤)の問題が華々しくて、その陰に隠れているが、金の問題は、政治の世界のみならず、永遠にスポーツ(プロでなくても)にまつわりついてくる問題だと考えていたらよいことは、歴史を見るとよく分かる。もう一つ例を挙げると、何故ゼロ点といわずに、ラブ(ラヴ)というのか。これはトランプなどにも用いられるようだが、play for loveという英語の慣用語を知ると一目瞭然、辞書に「賭けなしでする」とあって、play for moneyと対比されている。つまり愛情イコール金と無関係の意で、ゼロである。こういう言葉が公式の試合で使われるのが普通であったぐらいテニスは限りなく賭博場に近づいていったのであって、大酒が飲まれ、殴り合いがあり、盗みが横行した時代があったのである。バロック期の画家として有名なカラヴァッジョ(1573-1610)ですらラケットで人を殴り殺して逃走しなくてはならなかった。<sup>12)</sup>

先にスポーツ史が社会史でもあると述べたように、テニスの過去の形には各時代の社会が透けて見えるのであって、読者に、現在実践しているそのスポーツがどのような危険性、可能性を孕んでいるかを解説していると言える。退廃の度合いが過ぎて消えていったスポーツも少なくない筈で、そこまで退廃するというのは、現在では想像も出来ないであろうが、テニスは実際そうやって来たので人々は段々と愛想を尽かすようになり、次第にテニスから離れていった。イギリスでは17世紀クロムウエルの清教徒革命の時ひどく敵視されたというが、そういうことも拍車をかけたのであろう。一つにはルールが統一されず、一定していなかったことにも原因があるといわれ、例えば同じ寸法のコートがどこにもなかったということだが、面白いことに止めを刺したのはフランス革命だという。<sup>13)</sup> 主たる担い手だった貴族が肅正されたからである。だから16世紀と17世紀がテニスの黄金時代だとすると、18世紀に入って人々は少しづつ背を向け始め、愛好者が次第に減少していつ、19世紀には僅かに田舎の別荘などで行われていた程度だったという。これも田舎のスポーツに成り下がっていたわけだ。

とはいえ、スポーツの世界にもダーウィン流の適者生存の原理が働く。19世紀の後半になってテニスは単に息を吹き返したというより、新しく創造されたものとなって、ほぼ現代にまで続く姿を取り始めるのである。あるいはそこにホモ・ルーデンスの、ゲームや遊

びへの飽くなき愛好への創造心が活躍したというべきであろうか。人間は遊びがなければ生きられない存在であり、その遊びも人間の本性に適合したものだけが生き続け、特に多くは肉体の活動が必要なのであり、道具やルールとともに次第に洗練されてゆく。テニス史の流れを俯瞰すると、このルールや道具に、即ち遊びに向ける人間の情熱の大きさに圧倒される思いがする。すべての人間がこの方向に、つまりルールの厳守に向かって進んでゆけば、地上から争いはなくなるであろうのというような、あらぬ幻想すら抱かせるほどである。もちろん現実、逆に、その遊びが争いの原因となることもあるのだが。

「イギリス人はテニスを新しく発明したのだ」とあるテニス史の執筆者は言う。<sup>14)</sup> そのイギリス人の筆頭にメジャー W.C. ウィングフィールドという人物が挙がるらしいのだが、彼の第一の功績はローンテニスとしたこと、即ちテニスを戸外に出し、ネットをバドミントンから借用したことだという。そのような事実を知ると、「戸外へ？何、それまではどこでやっていたんだ？」と驚く人が結構多いのではないだろうか。ボールハウスと呼ばれる建物であるのが普通だった。現代のテニスを生まれた時から見ている人は、それが当然のあり方だと思いこんでいるのだが、実はこれが割合に新しくて、上記のように19世紀に形を変えて再出発した時からなのである。そこで人間はつくづく慣れの動物なのではないかと思ひ返すとともに、これが革命的な改変だったのだと改めて感嘆せずにはおれまい。サーヴという言葉はサーヴィス、即ち、奉仕の意の言葉から来ているのだが、かつては第一球は対戦相手が打ち易いように提供するのがルールだったことに由来する。如何に打たせないようにするか、と種々方法を案出する現代から考えると、うそのようだが、これもその時代以来らしい。テニスは長い間屋内でやるスポーツだった。だからこそ、先にも述べたような種々の悪徳の場ともなり得たわけである。

以上、オリンピックから始めて、特に球技、その中でも実例として対照的な性格を持つサッカーとテニスの歴史に僅かずつながら触れて、スポーツの通史の意義を考えてみた。つまり人間が長い時間をかけて、美しく、健全な肉体を求めてあれこれと努力してきたという歴史ではなく、本性の求めるままに、その折々の社会情勢や思潮に振り回されながらも、これらのスポーツの形態を磨き上げ、楽しみを求めて、現代の完成に近い形に仕上げて来た流れを追う歴史があり得るのではないかと、そしてそこから自己自身のみならず、人間全体を考えてみる機縁となるスポーツ史の意義を探ってみた。無論、粗雑なスケッチという排りは免れまいが、それを承知の上で、あえて実際にこのようなスポーツ史が可能ではないかというのが、このささやかな試みの結論である。

#### 注及び引用文献

- 1) 齊藤正躬『オリンピック』1964年、岩波新書 p.39
- 2) 村川堅太郎『オリンピア』昭和44年、中公新書 p.79
- 3) 村川、p.138
- 4) D.B.ダーレン他 加藤橋夫訳『体育の世界史』昭和33年ベース・ボールマガジン社、p.49

- 5) 今村嘉雄『西洋体育史』上下, 昭和23年, 明星社今村, p.73~
- 6) F.P.マグーン 忍足四郎訳『フットボールの社会史』1985年, 岩波新書, p.145
- 7) マグーン, p.111
- 8) マグーン, p.43
- 9) マグーン, p.126
- 10) Theo Stemmler : Vom Tennis. Eine kleine Geschichte des Tennisspiels. 1990 insel taschenbuch p.75
- 11) Stemmler p.76
- 12) Stemmler p.43
- 13) Stemmler p.61
- 14) Stemmler p.64



# A Consideration on the Significance of the Historical Research of Sports — An Essay —

Yuzo TSUNETO

*College of Life Science,*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received October 1, 2009)

In what is called the complete history of sports, it is usual to follow the history of concepts on sports through from the times of ancient Greece and Rome associating it with society, national politics, culture and education in the background and to follow the thought about modern sports such as by GutsMuts and Jahn after the Renaissance referring to the Middle ages when people despised the body.

That is, it seems to be a history seen from upper sight looking down at the whole with a core philosophy of a wish to build a beautiful and healthy body.

This is one style, but in the other hand it could be a history of sports like a history of society seen from bottom sight, which everyone seems to know but nobody does not unexpectedly and which is based on the history of sports as the expression of the human true character such as a combative instinct, an impulse for amusement, a simple feeling of pleasure from physical exercise and so on.

Because there could be a history of sports which is useful for consciousness of meaning of sports a person is playing and confirmation of his humanity, I tried to draft in rough about ball games as an example, especially about soccer and tennis.